



NO. 40 (通算40)

絵・文・題字 渋谷 一夫

富士山の謎 (10) 山頂レーダーの今昔

私が取材で登頂した昭和35年... 富士山頂には、まだ気象レーダーはなかった。真冬でも6名1班で、過酷な観測を続けていた。それが昭和39年に、山頂にレーダーが設置され、観測条件が大きく変わった。だがそのレーダーも今は山頂にない。どうしたのか。今昔を追ってみよう。

富士山頂は、かつて気象観測のメッカと言われた。レーダーが山頂から、電波を飛ばし、にらみを利かせていたからだ。

昔の天気図

昔は天気図を手書きで描いていた。全国の測候所や船舶・航空機などからのデータを元に、気象予報官が描いていたのだ。だから、時間もかかり、予報も難しかった。台風の規模や進路は更に難しかったのだ。だが、戦後は、観測技術も急速に進歩し、レーダー観測の時代になった。

山頂にレーダーを

そんな折、富士山頂に気象レーダーを設置する案が決まったのだ。富士山は日

本最高峰3776mだ。電波をさえぎる障害物は何もなく打つつけの場所だ。幸い観測所もある。ここに設置すれば、日本全国かなり遠くまで、瞬時に観測できる。台風の規模や進路は勿論のこと、集中豪雨や通常の天気予報もかなりの確になる。正に鬼に金棒だ。だが、心配がある。山頂は1年中強風だ。冬は雪と氷で零下数十℃だ。こんな場所に設置できるのか。心配だ。

新田次郎が主役

だが、計画は実行に移された。これを主導したのは作家の新田次郎だ。昭和7

年、気象庁入所当初の5年間、富士山測候所の交代勤務員だったという。この間、夏冬問わず、年3回も山頂に登っていたのだ。一度山頂に登ると、30日から40日は観測のため、山を下りられないのだ。だから、厳寒の富士山頂の気象は、すべて知り尽くしていたのだ。

その新田次郎が、昭和38年に測器課長となり、レーダー建設の全責任者となったのだ。正に大役である。だが、過酷な条件下で、あらゆる技術を駆使して、翌年の昭和39年に無事完成させたのである。この完成は、世界からも絶賛された。

この気象レーダーは、その後、山頂から日本各地ににらみを利かせ、天気予報や台風の進路予想など、数々の業績を残してきたのである。

気象衛星に席を譲る

だが時代は変わり、人工衛星の時代となった。35年間築き上げた気象レーダーのノウハウは、気象衛星「ひまわり」に受け継がれている。「富士山レーダー」は既に役目は終わり、今は山頂にはない。山を下りて山麓で「富士山レーダードーム館」として、その業績を後世に伝える役目を受け持っている。



山麓に下りた「富士山レーダー」



富士山頂に建設された「富士山レーダー」